ツバメ 追加 HO A ルルと階段前で別れた俺は、荷物を整理するために与えられた自室 へ戻る。

きれいな部屋だ、十分だと言ったけれど、実際に住むとなると狭く て窮屈だと思った。

座り込んだベッドだけはふかふかで、ようやく一息つく。

「ルル、かあ……」

ひとりで薬屋を営んでいると聞いていたから、どんな女性かと思ったら、俺と同い年ぐらいの子だった。

落ち着いたような印象を受けたけれど、虫が苦手だったりと隙があるように思えた。

しかし彼女がひとりだった理由がまさか、両親の死だったとは――。 死という単語に、母親がよぎった。

彼女のことは気の毒に思う。

両親が亡くなって、独りのところに俺のようなやつがきて。 けれど、俺にも亡くしたくない人がいる。

いつもどおり、相手に合わせて必要な嘘をつくだけだ。

そうすれば、徐々に心を開いてくれるはず。

今日案内された中で、印象に残ったのはやはり調薬室だ。

秘密の調合書があるとすれば、あの扉の奥だろう。

今すぐ中を調べたい衝動に駆られたけれど、父からは取り入れと言われている。

問題を起こすな、穏便に行え……。

父の言葉は、きっとそういうことだろう。

まずはルルとの仲を深めて、仕事を覚えることに専念しよう。

そう決意しつつ、窓の外を見た。

先ほどいた薬草園が広がっていて、葉が春風に揺れている。

見ているだけで心が落ち着いた。

この家の薬草園は思っていたよりも広く、種類も豊富で薬草以外の ものもあって。

クロラントのころは薬草だけを管理していたけれど、花も野菜も あって楽しそうだ。

そのままベッドに横になる。

窓から差し込むあたたかな陽気が俺を包み、眠気が一気にやってきた。

はっと目を覚ますと、窓から差し込む日は傾いていた。

廊下へ出ると香ばしい匂いがして、それをたどるようにキッチンへ 向かうと、ルルがテーブルに皿を並べていた。

グラタン、食用花を散らしたサラダ、湯剥きしたトマトを酢であえ たもの。

ふたりでテーブルについた。

「いただきます」

「どうぞ。口に合えばいいのだけど」

「……うん、おいしい!」

手をつけたのはグラタンだ。

見た目もよく、味も絶品で、スプーンを進める手が止まらなかった。 そして、話題は仕事の話へ移っていく。

薬屋リーファの庭師は、薬草園の管理・維持・採取のほかに、薬の配達が仕事に含まれることを教えてもらった。

「毎日薬を飲まなくちゃいけない患者さんとか、診察後に薬が用意できなかった人への配達ね」

「そうなんだね」

道に迷わないか不安だったけれど、それはのみ込んだ。 ここで大事なのは、仕事に対する真摯な姿勢だ。

「がんばるよ」

「不安もあると思うけれど、小さな町だし、地図もあるから大丈夫よ」

初めての仕事だから、きっと彼女はそう言ったのだろう。 だから、俺の不安が顔に出ていたわけじゃない。 ここで動揺を見せてはいけない。 俺は張りつけた笑顔で、彼女の言葉にうなずいた。